

# フーコーにおけるフィクションの問題

## ——「語り」と現れ——

長野聡一

### 序論—フィクションとは何か

ミシェル・フーコー [1926-1984] は自身の思想をしばしば「フィクション (le fiction)」と呼ぶ。通常「フィクション」とは非現実や虚実、空想や妄想といった、現実と対極にあるものを指す。フィクションということば自体は「つくる」という意味をもつラテン語 “fictum” に由来し、創作された小説や、現実において対応するものがないような空理空論がフィクションと呼ばれる。しかしフーコーがその言葉を用いるとき、必ずしもそれは非現実を意味しない。彼はフィクションの語源を意識するかのように、1977 年の対談で以下のように語っている。

フィクションの問題に関してですが、これは私にとって非常に大切な問題です。私はフィクション以外のものは決して書いたことはない、はっきりと自覚しています。だからといって、それが真理の外にあると言うつもりはありません。フィクションを真理の中で働かせ、フィクションの言説をもって真理の効果をもたらすことは可能だと思っています。いまだ存在しない何ものかを真理の言説が誘発し、つくりあげる。したがって「フィクションを作り出す(fictionner)」、そういう可能性はあると思う。歴史に真理を与える政治的現実から出発して歴史を「作り出し」、歴史的真理から出発して、いまだ存在しないひとつの政治を「作り出す」のです<sup>1</sup>。

フーコーは自分の書いたもの全てをフィクションだと述べる。しかし彼は、だからといってフィクションが真理と無縁であるとは考えてはいない。真理の言説は「フィクションを作り出す」。また、歴史に真理を与えるような政治的現実から歴史が「作られ」、その真理から政治がつくりだされる。フィクションを媒介として真理は機能し、政治や現実といったさまざまなものが作り出される。また真理自体も「作り出された」ものである。創造の過程にはつねにフィクションが付き纏っている。

現実から真理が作られ、また真理はいまだ存在しない現実を作り出す。それは真

理が単に現実の反映ではないことを意味している。現実と真理、またはいまだ存在しない現実と真理、両者のあいだにフィクションは介在し、両者を繋いでいるのではないだろうか。

しかし「フィクションとは何か」と問わない限り、この仕組みは理解し難い。単にそれは「存在しないもの」や「虚構」を意味すると断言することもできないが、どのようにしてフィクションが、真理と現実のあいだにあつて、両者を機能させるものであると言えるのだろうか。したがって、フィクションが虚構以上の意味を持ち、そしてそのようなフィクションの働きの如何を分析する必要がある。

以下では、フーコーにおけるフィクションの概念について論じる。まず第一章ではフィクションが多く言及される文学論について論じ、そして第二章では文学的言語においてのみならず現実中存在するフィクションについて論じる。議論を先取りしておく、フィクションとは「現れ」に関わるものである。第一章ではその「現れ」について論じ、また第二節ではそれを『〈知への意志〉講義』のノモス論へと接続させて論じる。なぜならノモス論はノモスという真理がその「現れ」の場である「フィクションの場」を必要とすることを示すものだからである。

## 1. 文学におけるフィクション

第一章では、フーコーの文学論を分析する。序論で記述したようにフーコーのフィクション論はその対象を文学に限定するものではないが、まずは文学論におけるフィクション概念を考察する。彼の文学論において、フィクションは単に文学のひとつのジャンルとしての虚構作品等を意味するのではない。第一章ではフィクションが言語の働きにおいて重要な役割を果たすこと、またそれは物語の「内容」のための「形式」でもあるということを示す。

### 1-1 実在のためのフィクション

第一節では、フーコーの文学論を分析する。1960年代、フーコーは盛んに文学について論じた。そのなかでもアラン・ロブ＝グリエ[Alain Robbe-Grillet, 1922-2008]について論じた「間隔、アスペクト、起源」(1963)、またジュール・ヴェルヌ[Jules Verne, 1828-1905]について論じた「ファールルの背後」(1966)においてフィクションについて言及している。まず第一節では「間隔、アスペクト、起源」の読解を通じて、フィクション概念について考察する。

本稿は序論でフィクションが現実と乖離したものではないと強調したが、その点について述べている箇所を引用する。まずフーコーは「間隔、アスペクト、起源」において以下のように述べている。

フィクションなるものがまさに、日常的なものの彼方でも内的な秘密でもなくて、私たちの目を打ち驚かせ、現れるものすべてを私たちに提供するあの矢の軌道であったとしたらどうだろうか。そのときフィクションなるものは諸事物を名付け、語らせるもの、語の至高の力 (*le souverain pouvoir des mots*) によってすでに分割された存在を言語において与えるものとなるかもしれない<sup>2</sup>。

フィクションとは「日常的なものの彼方」にも、「内的な秘密」にも関わらない。つまり、日常から離れた空想的なものや、目の前に見えるものの内部に潜んだ知られざる秘密のようなものではないのである。それはむしろ、「現れるもの」すべてをわれわれに差し出すものなのだ。つまりフィクションとは現前を支えるものであると言える。しかし、同時にフィクションとは事物を名付けたり、語らせたりするものを言語において与えるものである。それはつまり、上述の現前の過程を言語において表現するものでもある。物を名付け、語らせる言語の働きにおいてフィクションはどのように関わるのだろうか。フーコーはそれを「遠隔化」という言葉で表現している。

フィクション的なものとは言語に固有な遠隔化 (*éloignement*) であるということを見せるべきだろう——遠隔化は言語のうちに自らの場をもつのだが、それはまた、言語を広げ、散乱させ、分割し、開くものでもある<sup>3</sup>。

やや短い引用であるが、ここではその「遠隔化」が言語において重要な働きをするものであるということが示されているという点で興味深い。フィクション的なものとは言語に遠隔化をもたらす。しかし、その遠隔化とは「言語を広げ、散乱させ、分割し、開くもの」でもある。つまり、遠隔化とは通常の言語の秩序を混沌に追い遣るものであると同時に、言語を「開く」もの、つまり新たな秩序へと組み替えるものなのである。したがって、遠隔化とは言語が機能する上で重要な働きをするものであると言える。

この遠隔化は、作家プレネに倣って「断片化」とも言い換えられる。

この間隔の炸裂 (*l'éclatement de cette distance*) を、プレネは一言で示して

いる。「断片化は源である (Fragmentation est la source.)」。下手な言い換えをすることで。相貌や線の、絶対的な劈頭である最初の言表は決して可能ではないし、道に迷った現象学の名において、あるいはそれを目印にして、文学が受け入れることを任務とした物の原初的な到来もまた、可能ではない。フィクションの言語はすでに語られた言語のなかに、決して開始されたことのない眩きのなかに挿入されるのだ<sup>4</sup>。

「断片化は源である」、とは単純な意味での「最初の言表」というものを拒絶している。つまり、言葉の絶対的な起源といったものが問題なのではないということである。つまり、つねに問題となるのは「すでに語られた言語」である。フィクションはすでに語られた言語のなかに挿入され、炸裂する。そして、同時に「眩き」であるとしか認められていなかったことばのなかにも挿入されることで、新たな言語をもたらすのである。

もしフィクションなるものとは何かと尋ねられたら、私は不器用にこう答えるかもしれない。存在するままの、実在しないものの言葉の葉脈 (la nervure verbale de ce qui n'existe pas, tel qu'il est.)。

フィクションなるものは「存在する (il est) ままの、実在しないもの (ce qui n'existe pas) の言葉の葉脈」である。これが意味するのは、フィクションなるものは、存在するもののまだ実在の水準にないものたちを繋ぐ葉脈であるということである。フィクションは実在しないものの言葉の葉脈に関わり、また「断片化」を生じさせることでそれらに新たに実在性を与えるものなのである。

しかし、文学的で曖昧な表現が多いため、フィクションが如何なるものであるかという点は未だ解決されていない。したがって、第二節ではもう少し具体的にフィクションについて論じることにする。

## 1-2 フィクションとファールブル

第二節では、第一節に引き続き文学論を分析する。「ファールブルの背後」(1966年)でフーコーは「フィクション」を、「物語」を意味する「ファールブル (fable)」と対比させて論じている。第二節では、ふたつの対極的な概念の関係性を考慮しつつ、フィクション概念について検討する。

さて、先ほど述べたようにフーコーはファールブルとフィクションを厳密に区別し

ている。

物語 (récit) の形式をもつすべての作品において、「ファーブル (fable)」と「フィクション (fiction)」とを区別しなければならない。ファーブルとは、語られているもの (さまざまなエピソード、登場人物、物語のなかで登場人物たちが働かせている機能、出来事) である。フィクションとは物語のひとつの体制 (régime)、というよりもむしろ、「物語られる」物語が従うさまざまな異なる諸体制のことである。例えば、語り手の自身が物語るものに対する立場、[...] 事物や人々を見渡す、客観的な記述を行う中立的なまなざしが存在しているかないかないか<sup>5</sup>。

ファーブルとはつまるところ、物語の内容、登場人物や彼らが遭遇する出来事や、その周辺の物事などを指す。ひとは物語を読むとき、この内容を把握しながら読書を行う。他方フィクションとは、通常いわれるような文学におけるひとつのジャンル (虚構文学) ではなく、物語が「物語られる」ときに従う諸体制のことを指すのである。それは語り手の存在、その立ち位置に関わるものであり、誰が、どのように物語っているのか、ということに関わる。物語の内容自体はひとつしか存在しないが、その物語を誰が、どのような立場で、どのように語っているのかを考慮するならば、物語の分析は多面的なものとなる。

しかし問題は文学作品の分析ではない。ここで強調しておきたいのはファーブルとフィクションの区別によって、フィクションなくしてファーブルは存在しえないということなのだ。物語の内部でファーブルが語られる際、そこには語り手に関係するフィクションの存在が不可欠である。しかし、このことが敢えて語られるのは、フィクションが 19 世紀以降に掻き消されているからである。

物語を作者が中断し、自分が書いているテキストからいったん目を離して、読者に向かって直接語りかけ、語られている出来事の判定者乃至証言者として読者を召還するという種類の語りの言説は 18 世紀にしばしば見られるものだった。そのような言説は、しかしながら 19 世紀になるとほとんど姿を消してしまう。その代わりに、書くという行為に結びついた言説、つまり語りが語られてゆくのと同時に進行する言説、そしてその語りの内側に閉じこもる言説が立ち現れてくる。つい百年程前のことだ。しかし、その種の言説はおそらくは圧倒的な専制ぶりを行使したのだろうか。その結果、唯一の語り手の言説のなかに、またその唯一の語り手の書くという行為のなかに根拠

を置かないフィクションは、ことごとく、素朴すぎるとか、人為的であるとか、くそリアリズムであるというふうな非難に曝されて追放の憂き目を見ることになるのである<sup>6</sup>。

フーコーによれば 18 世紀には、作者が物語を中断させて、テキストから離れて読者に語りかけるとことがしばしば起こっていた。物語は中断を繰り返し、ファーブルは度々途切れる。ファーブルだけを読み進めるならば、その中断は余計なものではあるが、フィクションという視座に立つならば、そのファーブルの語り手の登場は物語が語られるときに従う体制、つまりそのファーブルが持つ形式であるフィクションの様態を知るのに必要なものでもある。しかし 19 世紀になると、ファーブルの中断は許されず、直線的な物語だけが存在するようになる。つまり唯一の語り手だけが暗黙の内に存在し、その語りの手の言説だけが続くことになる。そこで重要視されるのは物語の内容、つまりファーブルのみであって、誰が、どのような立場でその物語を現しているのかということは全く問題とならない。

このことは単にフィクションがファーブルを形成しているというだけではなく、ファーブルの現れの様態が重要であるということの意味する。作中の言表というのは実体的なものではなく、それが伴うフィクションの如何によってその言表はひとつのファーブルへと形成される。ヴェルヌの作品は、ファーブルの断続によって、その言表とフィクションの関係を浮き彫りにする。

ファーブル自体が同じであっても、誰が語ったのか、どのように語ったのかなどを考えると、物語は実質的にはそれぞれ異なるものとなる。19 世紀の文学はこのフィクションの視点を捨象し、ファーブルのみを考慮し、以上のような断続的な物語を非難してきたという。フーコーはこれと逆に、フィクションを盛り込んだ文学に言及する。そして、これが「文学」であるという点に注意すべきである。なぜならフーコーは以下のように語っているからである。

現実には人が何かを話すとき、「ファーブル的な (fabuleuses)」事柄を話すことはもちろん可能である。語る主体、その言説、彼の語る物事の三項が取り結ぶ三角形は、そのシチュエーションにより外から規定されている。つまり、フィクションは存在しない。ところが、文学作品というのは現実の言説の類似物であって、そこでは先の三角関係はすべて語りの行為そのものにおいてのみ存在しているのである<sup>7</sup>。

フーコーは現実と文学を比較し、フィクション的な文学の存在意義をさらに明確

化させる。現実においてある人物がフェアブルを語ることはいうまでもなく可能である。しかし、その人物自身を規定するものや内容を規制するものは彼の言語の外側に位置している。他方、文学作品のなかにはそれら全てが語りの中に収斂され、文字に現れる。文学においてはフィクションと言語は分離せず、その語りのなかに全てにフィクションが内在する。語りの行為そのものが記述される文学においては、フィクションと言語はまったく分離せずに存在するのだ。

しかし、先の引用にフィクションは現実には存在しないとあった。しかし文学においてはフィクションが語りにそのまま内在しているというだけで、現実にもフィクションは存在するのである。フィクションは文学に限ったことではない。次節では、現実存在するフィクションについて論じる。

## 2. フィクションと真理

第二章では、現実存在するフィクションについて論じる。先の節までで考察したフィクションの働きを考慮しつつ、そのフィクションが「虚構」とされるに至る過程について論じる。そこで示したいのは形式としてのフィクションと、虚構としてのフィクションとが重なり合う地点である。1971年のコレージュ・ド・フランス講義『〈知への意志〉講義』においてフーコーは、フィクションをひとつの空間として以下のように語っている。

知の意志は、錯覚を造り上げ、虚偽を拵え、誤謬を繰り返し、真理がそれ自身ひとつの効果 (un effet) でしかないようなフィクションの空間 (un espace de fiction) において自らを繰り返すものなのだ<sup>8</sup>。

フーコーはニーチェに倣って、真理がひとつの「効果」とであると述べる。真理とは最初から存在するものではなく、ひとつの効果として生じたものに過ぎない。そして、その真理の創造には「知の意志」が関わっている。「知」とは、主体と客体の関係に先立つ認識以前のものであり、対象的認識における知識のことではない。むしろ、主体と客体関係の成立に関わるものである。そしてその「意志」とは主体的な意志とは異なる。その「知への意志」の作動によって、真理が生まれるのであるが、その場というのが「フィクションの空間」なのだ。

「知への意志」を分析することでフーコーは、「フィクションの空間」において真理はひとつの「効果」として自らを展開することを示す。フーコーにおいては真理

とは造り上げられたものとされる。例えば、言説分析の方法論を明らかにした『知の考古学』では、既に自明とされている様々な概念が宙吊りにされる。挙げられるのは伝統や影響といった連続性に関する概念であるが、真理も例外ではない。

言表は過去を造り上げ、自身に先行するもののうちに自分自身の系統を決定し、自身を可能にし、もしくは必然的にするものを描き直し、自分と両立しえないものを排除する。そして言表はその言表的過去を、獲得された真理、生じた出来事、変容可能な形態、変形するための素材、それについて語ることのできる対象として措定するのである<sup>9</sup>。

言表は自らを起点とし、過去や起源さえも書き直す。自らの存在を正当化し、必然的であることを主張するためには過去の書き換えが必要であり、また都合の悪いものは排除の対象となる。そのようにして真理は自らの正当性を主張するのである。しかし、真理が作られたものとしても、真理が存在しないわけではない。真理はそれが真理であることを「主張する」言説によって真理となる。真理の周りに張り巡らされた言表による条件付けのネットワークの働きによってのみ真理は真理たりうる。したがって、真理は作られたものであると言えるのだ。しかし、「知の意志」は「フィクションの空間」においてその事実を隠蔽してしまう。

しかし、どのように。「言表の働きによって」と言われても、それを回答とすることはできない。『〈知への意志〉講義』ではその言表が働く場所、そして自らの働きを隠蔽する場所、つまり「フィクションの場」が述べられている。したがって第一章で明らかになった形成するものとしてのフィクション、また隠されたフィクションの重要性を意識しながら、第二章でも引き続きフィクションについて論じる。そして最も注目すべきは単に虚構ではなく、真理が述べられるための場としてのフィクションの働きについてである。

## 2-1 フィクションの場所

第一節では「フィクションの場所」について論じる。フーコーは、この場所を「どこでもない場所」、「中央」、「共通の場」と呼ぶが、この場所で「ノモス」が語られると述べている。

ノモスは、どこでもない場所 (nulle part) から、あるいは中央 (un point médian) から、あるいは共通の場所 (lieu commun) から語らなければなら



ない<sup>10</sup>。

「どこでもない場所」、「中央の」、「共通の場所」から「ノモス」が語られる<sup>11</sup>。ノモスとは法のことを意味し、法が民主制に基づく場合、それは万人共通の場所、特定の人間の私利私欲から離れた場所から語られる必要がある。そこは中央の場所であり、共通の場所である。このノモスが語られる場こそが「フィクションの場」と呼ばれるのだ。しかし如何なる意味でそれはフィクションなのだろうか。本稿の第一章での考察を引き継ぐならば、この「フィクションの場」は「どこでもない場所」と言われているものの、実はそこで語るのは何らかの権利を有する誰かであるということが言えるのではないだろうか。つまり、この場合「フィクションの場所」とは、現実には存在する筈なのに存在しないとされている虚構の場であるという意味をもつとともに、実はそこは言語と主体を結びつける場でもあるという意味ももつ。

そもそも、問わなければならないのは「ノモス」とは何かということである。通常、ノモスとは成文法を意味すると言われているが、フーコーはそれがノモスの本質ではないと主張する。

しかしノモス (le νόμος) という語は不文法 (une loi non écrite) も指し示す。たとえばヘロド罗斯は、明らかに成文化されていない一群の規則を指し示すにあたって、スキュタイ人のノモイについて語っている。しかしとくに、たびたび取り上げられるのが、スパルタの法である。この法に関して強く主張される（また常に称讃される）のは、それが成文化されずに、教育、模範、助言、人々のあいだの名誉と誇りの習慣によって伝達されるということについてである<sup>12</sup>。

ノモスは必ずしも成文化されているわけではなく、それは「ノモスの可能な諸形態のひとつ」でしかなく<sup>13</sup>、むしろノモスは教育や模範、助言、慣習等によって補強されるのである。成文化がノモスの本質ではなく、最も重要なのはエクリチュール以外のものによってもその存在が伝達されるという点なのだ。またノモスは成文化されることで、その不可侵性や神聖性を誇示するとしても、その法は議論や投票等によって変更される場合がある。「石に刻まれ、ロゴスに曝され、習慣の熱意によって伝達され、自然のなかに読み取られうるものとして、ノモスはいわば常にそこにあるのだ<sup>14</sup>」。したがってノモスは、法は民主制において、常にロゴスに曝され、また慣習と結びつき、また自然に適應するものであると定義づけられる。しかし、これらの要素は実はノモスを真に構成するものを隠蔽するためのものでしかないの

である<sup>15</sup>。

このことは、ノモスの創設がエウノミアーという名で呼ばれるものの設立と深く関連するということによって証明される。

おそらく、エウノミアーという語を **NEM** という語根に直接結びつけなければならない。これはノモスにも見出されるが、エウノミアーの方がその古くからの意味を保持してきた。この **NEM** という語根が示すのは、分配 (*la distribution*) と分割 (*le partage*) である<sup>16</sup>。

フーコーはエウノミアーと **NEM** という語根の関連性を強調し、それがノモスにも見出されることを示す。その **NEM** という語根は分配と分割の二つの意味を指し示すという（「エウノミアー」の《ノミアー（*-nomia*）》は動詞 *nemô* に由来し、その動詞が意味するのは、「扱う」、「分配する」等である）。

ヘシオドスのテキストにおいては、秩序の女神エウノミアーが、平和の女神および正義の女神とともに姉妹として登場するが、この女神たちは時の女神とされている。したがって、この女神たちは自然の移り変わりと人間社会の秩序を司り、「時間、季節、時のリズムといった、規則的な時機、規則的に守られる時機から、隣人同士、債権者と債務者、裕福な人々と貧しい人々とのあいだの平和が生じる」ことや、「正義すなわち一人ひとりの正しい取り分が生じる」ことに関わる。つまり、エウノミアーとは「よき基本法すなわち、万人によって認められた正しい法の集合」などではなく、富とその流通の良き配分、出費と返却と分配の作用における規則的な動きのことなのである。エウノミアーとは「良き法制」というよりも、むしろ「配分」に関わるものなのである。

フーコーはソロン〔紀元前 639 年頃・紀元前 559 年頃〕がエウノミアーの創設者であるとする。ソロンはデュスノミアー（悪しき行政）に対抗してエウノミアー（良き行政）を打ち立てる。それ以前のアルカイックな形態においては、富と権力は互いに比例し合う関係にあったが、ソロンの改革によって経済と政治は新たな関係を結ぶようになる。そこにおいて、貧しい者は「権力をもたない者」ではなく、最小の権力を持つ者である。そこには確かに政治的権力と経済の相関関係は存在するが、ソロンが行うのは権力の配分のみであって、経済の配分には関わらないのである。その原則を定めるのがノモスであり、それは「権力配分の一つの原則に与えられた名称」である。したがって、ノモスとは権力と富の分断である。しかし、それは見せかけの分断に過ぎない、それは権力の政治的分配が富の我有化の様式を維持し継続させていることを隠蔽する分断なのだ。

なぜなら、財産の階級に応じて政治権力が配分されることには変わりなく、それは経済的不平等を再生産し、延長し、制度化するのである。しかし、ノモスの方はそのことは自らと全く関係なく、自らは中立的な場において政治的配分を行っている自称するのである。

このようなノモスの特徴は以下のように導き出される。

- 不変で不可侵のエクリチュールとして。これが不可侵であるのは、それによって保護される富の我有化が不可侵でなければならないと同様である。
- あるいは、万人によって公に語られる言説として。これによって、どんなに貧しい者であろうと誰もが経済的関係から完全に独立して権力を行使しうることになる。
- あるいは、富および不平等への無関心を教える一方で、法の尊重を教える教育法として<sup>17</sup>。

「我有化された富の不可侵性」、「経済的関係からの独立」、「富への無関心を教える一方で法の尊重を教えること」という三つの特徴から言えるのは、ノモスが経済を維持するものである一方で自らは経済的関係から独立していることを主張するものであるということである。なぜかと言うと「権力の政治的配分が富の我有化の様式を維持し継続させていることを隠す」必要があるからである。ノモスそのものが中立的なものであり、政治的なものと経済的なものが分断された空白地帯に位置する限りにおいて、ノモスは自らの活力を引き出すのだ。そうでなければ、ノモスはノモスとして機能することができないのである。したがってノモスはその空白地帯で述べられることになるが、その空白地帯こそが「フィクションの場」であり、そもそも最初から存在しない。つまり、本来は政治的なものと経済的なものは結びついているのだ。

こうして「フィクションの場所」が形成される。これは「現実の歪曲」ではあるが、そうすると歪曲を超えた現実が存在するという短絡的な結論を導き出すことになる。本稿はこの「フィクションの場所」をもう少し注意深く分析する。第一章で導き出されたのは、フィクションとはフェアブルが「現れる」ために従う諸体制であるということであった。それを踏まえると、現実の「フィクションの場所」も真理が現れるための場であると言えるのではないだろうか。したがって、次節では「フィクションの場所」において真理を現す者について論じる。

## 2-2. フィクションと「現れ」

ソロンの「フィクションの場所」は現実には存在するのに、存在しないように振る舞う見せかけの空白地帯であった。その限りにおいて、フィクションは虚構という以上の意味を持つことはない。しかし、本節ではその「フィクションの場所」において語る人物に注目することでフィクションがもつ虚構以上の意味を示す。真理が真理たりうるためには、それが真理として語られる必要があるのではないだろうか。

前章第二節で論じたように、フィクションとはファールを語ることに関わる。それはファールの語りの様態を規定するものなのである。したがって、フィクションに焦点を充てることでファールという物語の内容ではなく、その「現れ」の様態を考察する視座に立脚することが可能となるのだ。本節では現実の「フィクションの場所」ではどのようなことが生じているかを問う。

そこで語る者とは以下のような人物である。

その地帯に人間たちの法、つまり無理解に対して力および活力を与えるために、ひとつの真理のもとで富も権力も持たずに事物の法を曝露する者、という人物像が姿をあらわす<sup>18</sup>。

その者とは「賢者 (le sage)」である。「フィクションの場所」では、誰でも語っていいというわけではない。語ることが可能なのは特定の限られた人物だけなのだ。ノモスを語る賢者の特徴は以下のようなものである。

この形象は、政治権力の分配の原理に位置づけられる。ただし、それが位置づけられるのは政治的権力が強制を伴って暴力的に行使される場所ではない。政治権力の法が表明される場所である。賢者は中央に場所を持つのである。ソロンのように、権力を行使せず、単に法を語るだけの賢者もいる。そして、何人かの僭主がこの賢者の列に並べられるとしたら、それは彼らが法をそれ自身によって作動させておき、彼らが衛兵を必要とせず、彼らを通してノモスが暴力なしに通用するという理由によってなのだ。しかし賢者は同時に、事物の秩序を知っている者でもある。それは世界を旅したこと、遠くから教えを集めたこと、天体とその陰りを観察したことによって、世界を認識している者なのだ。そして賢者は、いかなる罪によっても穢されていない者だ<sup>19</sup>。

賢者は、政治権力の分配の本源に位置づけられはするが、あくまでも「真ん中に場を持つ」者なのである。だからこそ、賢者を通すことで暴力なしにノモスが通用するのだ。そして、人間の秩序ではなく事物の秩序を認識できるが賢者である。しかし、それらが可能なのは彼が「穢されていらない」、純粋な者だからなのだ。なぜなら「不純な者は、事物の秩序を認識できない」からである。これが賢者の性質であり、この性質をもつ者だけが「フィクションの場所」において語るができる。

このようにフィクションの場所では語る者を限定することは、『言説の領界』においても言及されている。その限定は「語る主体の稀少化」と呼ばれている。

問題となるのは、言説を作用させるための条件を決定し、言説を述べる個々人に対していくつかの規則を課すことで、誰もが言説を自由に扱いうるなどということが起こらないようにすることである。つまり、語る主体の稀少化（raréfaction）である。[...] そうした制限システムの最も表面的で可視的な形態は、儀式（rituel）という名のもとにまとめられるようなものによって構成されている。儀式は、語る個人（対話、尋問、朗唱といったものの作用のなかでしかじかの位置を占め、しかじかのタイプの言表を言述すべき個人）が所持すべき資格を定める。儀式は、言説に伴うべき身振り（les gestes）、振る舞い（les comportements）、状況（les circonstances）、しるしの全体（tout l'ensemble de signes）を定める<sup>20</sup>。

言説が作用するための条件に伴って「語る主体の稀少化」が生じる。ある言説が作用するためには、その言説を語る者を制限しなければならない。ノモスの場合、それを語る者は「賢者」に限定されるのだ。最も重要なのは、それが「儀式」によって構成されているという点である。儀式は言説に伴うべき「身振り」、「振る舞い」、「状況」、「しるしの全体」を定める。これらの行為やしるしといったものは全て、真理を「現す」ためにあるのではないだろうか。

フィクションの場は、「空白」であり「中央」である必要がある。それはノモスが真理として機能するために非常に重要ではあるが、われわれはフィクションが「場」であることに注目しなければならない。賢者にとって重要な役割とは、その場において「語る」ことなのである。その行為はノモスを顕在化させる。その語りなくしてノモスは存在し得ず、フィクションの場が設えられる必要もなくなる。つまり、フィクションの場とは語る行為において真理を示すための場なのだ。

第二節で考察したファールを形成するフィクションの働きにおいても、そのフ

イクションはそのファールを現すことに関わっていた。現実の「フィクションの場所」においても、いかに「フィクションの場所」が虚構であり、そこで述べられる真理が政治的あるいは経済的なものと結びついているとしても、その真理がある何者かによって述べられることこそが最も重要なのである。真理をその「内容」においてではなく、それが語られる場と相関して考えること、つまりその真理の現れの間を思考することこそ、フーコーの真理論の骨目とするところのものなのだ。

### 3. 結 論

「フィクション」は単なる虚構や非現実を指し示すものではない。文学論においては言語の働きにおいて重要であることが示され、さらに「物語の内容（ファール）」の語り手に関わることが証明された。

また文学においてのみならず、現実においても「フィクションの場所」が確認された。それは真理が真理として存在するために真理が語られる場である。そして、重要なのは文学においても現実においても、フィクションとは真理をその「現れ」の水準で思考することを可能にする視座を提供するということである。フーコーのノモスに関する分析は、ノモスという言葉そのものの編制とその現れを同時に示す。ノモスとそれを顕在化させる賢者の存在は、真理を「現れ」の水準において思考することを可能にするのである。それはまた、フーコーの初期文学論と中期の「権力論」が重なるのが言語や振る舞いによる「現れ」という地点においてであるということを示す。

『知のアルケオロジー』においては、言説をその「現れ」において分析することが目指されていたが、フィクションの概念はそのことを具体的に指し示すものであると言える。フィクションの場所に定位し、そこでの「現れ」の様式を分析すること、これこそフーコーがその哲学において重要とした視座なのだ。

---

<sup>1</sup> Michel Foucault, *Dits et Écrits, Tome 3*, Gallimard, Paris, 1994, p. 228.

<sup>2</sup> Michel Foucault, *Dits et Écrits, Tome 1, 1954-1975*, Gallimard, Paris, 2001, p. 308.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 308.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 309.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 534.

<sup>6</sup> *Ibid.*, p. 534.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 534.

<sup>8</sup> Michel Foucault, *Leçon sur la volonté de savoir, Cours au Collège de France. 1970-1971*, Gallimard, Paris, 2011, p. 190.

---

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 134.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 155.

<sup>11</sup> 「共通の場所」(un lieu commun) に関しては、『言葉と物』の序文にあるボルヘスの中国の百科全書についての言及やルネ・マグリット論である『これはパイプではない』が想起される。どちらのテキストでも「共通の場」とその崩壊が論じられているが、重要なのは暗黙の内で認められ、見えなくなっている「共通の場」を炙り出すという点にある。

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 145.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 145.

<sup>14</sup> *Ibid.*, p. 146.

<sup>15</sup> ノモスが不文法をも含むものであるということは、ノモスの現れの形態が必ずしも言語に限られるものではないということを意味していると思われる。この点に関しては、1980年度のコレージュ・ド・フランス講義『生者たちの統治』との深い関連性が見られる。

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 150.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 156.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 157.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 182.

<sup>20</sup> Michel Foucault, *L'ordre du discours, leçon inaugurale au Collège de France prononcée le 2 décembre 1970*, Gallimard, Paris, 1971. p. 38-41.